

2025 年度 ソニー幼児教育プログラム
「科学する心を育てる」～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

0歳児 探究の軌跡 ～環境が変えた学びのかたち～



社会福祉法人種の会
アルテ子どもと木幼保園
園長 山田寿江

目 次

I 「科学する心を育てる」についての考え方・取り組みのテーマ1
II 実践の報告1
1. 日常に自然を取り入れる1~2
(1) 自然物と遊ぶ2
実践事例① 音を楽しむ2
実践事例② 自然物のオブジェ	【考察 1】2~3
実践実例③ 自然物からイメージする	【考察 2】3~4
実施事例④ 自然物を使った制作遊び ～節分制作『鬼ヶ島』～4~5
【考察 3】6
(2) 光の探究6
実践事例⑤ 光を探る6
実践事例⑥ 影を知る7~8
～MH の影探し～	【考察 4】8
2. モノとの関りをアートで紡ぐ8
(1) 『感触遊び』から『ひなまつり制作』へ8~9
実践事例⑦ 塩の感触遊び	【考察 5】9~10
実施事例⑧ 塩と自然物10~11
実施事例⑨ 塩を使った制作遊び ～ひなまつり制作『菱餅』～11~12
【考察 6】12
(2) 本物に触れる12
実践事例⑩ だるま制作12~13
<アート展 0 歳児保護者の感想より>	【考察 7】13
実践事例⑪ だるま制作 ～Y K の葛藤～13~14
実施事例⑫ だるま制作 ～「イヤ」という権利～	【考察 8】14~15
III 考察に基づく課題と今後の方向性や計画15

I 「科学する心を育てる」についての考え方・取り組みのテーマ

本園の論文応募は今回で五回目となる。これまでの論文では、「心の動き」「感じる心」が探究の源であり、対象物と向き合い他者と対話することを通して「探究の仕方」を学んでいる。それが「科学する心を育てる」ことに繋がっていると語っている。

当園では、子ども達が自然に触れ五感を通して刺激を受け、探究することを大切にしており、子ども自らが主体的に学び、遊びを展開していく環境づくりを心がけている。

そんな中、2024年9月から一年間という期限付きではあるが、レッジョ・エミリアアプローチを実践しているイタリア人のアトリエリスタがスタッフに加わることとなった。レッジョ・エミリアアプローチで重要なことの一つに「保育環境は三人目の教育者」という考えがあり、環境ツールが学びの仕方を提供するといわれる。そこで、彼女に本園の0歳児から5歳児の全クラスに各一週間ずつ入ってもらい、子どもと一緒に遊ぶ中の気づきを参考に各クラスの担任と話し合い、それぞれの保育室の環境を変更した。とりわけ、0歳児室の環境設定はこれまでにないものとなり、子ども達がどのように遊びを展開し学んでいくのかに着目しながら日々の保育を実施し記録していった。それらを改めて振り返り、「環境がもたらす影響」という観点から「科学する心を育てる」ことに必要なものを検証したいと考えた。

II 実践の報告（2024年9月～2025年3月）

1、日常に自然を取り入れる～遊びは無限大～



図1



図2

2024年9月。

保育室の壁にサンキャッチャーの光が映っていることに気づいたり（図1）、鉢植えの土に触ったり（図2）する子ども達の姿から、光や自然物に興味を持っていることがわかった。そこで、保育室に“自然物のコーナー”と“光のコーナー”を設置することにした。



自然物のコーナー

*用意したもの

- ・自然物（まつぼっくりなどの木の実、木片）
- ・丸太スライス、コルクの鍋敷き
- ・100cm角の黒いプラダンボール
(自然物で遊ぶ場所を明確にするため)
- ・ステンレス製のボウル、容器



光のコーナー

*用意したもの

- ・ライトテーブル
- ・アルミホイル
- ・アルミ蒸着シート
- ・アルミ素材の紙や日用品
- ・天井から光る素材を吊り下げ、より光を意識できるようにした。

（1）自然物と遊ぶ

実践実例① 音を楽しむ（2024年9月～2025年3月）

棚に並べられた自然物を目の前にした子ども達は、初めて見るものばかりで圧倒されたのか遠巻きに様子を伺っていた。保育者とて同様で、どう遊んだらいいものかと思案しながらも自然物を容器に入れて揺らしたり叩いたりして遊んでみた。それを見て興味を惹かれたのか子ども達も手を伸ばして遊び始めた。自然物を容器に入れたりひっくり返したり、容器と容器を叩き合わせたりするようになり、室内は自然物と容器、自然物同士、自然物と床がぶつかる音に溢れ、子ども達の声も響くようになった。

（図1）では、容器に入れた自然物を棒でかき回しながら「あー、あー」と大きな声を出している。子どもの遊ぶ様子を見ながら、新たな素材を加えたり容器の材質を変えたりすると、（図2）ではプラスチック製のカップを上下に揺すって素材を弾ませ、眼を瞬かせながら中身がすべて出るまで振り続けた。高月齢児のMHは、自分の指先がまつぼっくりに触れた時にボウルと擦れて微かな音が鳴ることに気づいた。どうすれば同じような音が出るのかを確かめるようにして指先を動かしていた（図3）。



図1



図2



図3

実践実例② 自然物のオブジェ（2024年9月～2025年3月）

自然物を丸太スライスやコルクボードに並べるだけでも自然物ならではの温かみや素朴さが醸す味わいが感じられオブジェのように見えた。遊びは保育者が子ども達と一緒に遊ぶ中で互いに影響し合いながら発展していった。

(図4)では、保育者が丸太スライスに素材を載せるのを真似て木片を盛っている。テラスで最も低月齢であるNRは、無作為につかんだ素材を丸太スライスの上で放つという行為を繰り返した。(図5)では、高月齢児二人が一つの丸太スライスの上に一緒に素材を並べている。素材をじっくり見て好きなものを選び、友達の様子も見ながら載せていました。

(図6)自然物に積木を足し、高低差をつけながら素材を慎重に置いていた。



図4



図5



図6

【考察1】

(図1)のTMは、入園以来ほとんど泣くこともなければ表情も乏しく、保育者に甘える姿も少なかった。自然物と遊ぶようになってから声を出すことが増え表情も豊かになった。自然物と遊ぶ時に鳴り響く音は、大きな声を発したくなるほど本児の感情を揺さぶったと考える。匂いや手触りなど五感でも刺激を受けたことだろう。(図2)では、素材がぶつかり合う音を面白く感じると同時に自分で作りだした事象への驚きや喜びも伝わる。

(図3)では、繰り返し遊ぶことで微細な音の違いに気づき自分で仮説をたてながら探究していると捉えた。(図4)は、無作為にもかかわらず、その手を止めずに続けたのは、丸太スライスの上に自然物の山ができていくこと、すなわち自分の手でバラバラだった物が形になっていく面白さを感じたのではないか。(図5)では、まだ言葉でのやり取りはできなかった二人だが、一つのものを二人で作ろうとする姿から自然物を通して対話していることが伝わる。(図6)では、積木という新たな素材を加えることで立体感が増し創作する面白さを体感しているように見える。崩れないよう試行錯誤しながら自然物を載せる緊張感もあつただろう。

このように自然物と遊ぶことには見本もなければ正解もなく遊び方は無限だ。0歳児であろうが大人であろうが触って試して遊び方を探っていくしかない。それだけに想像力が養われ、創造力も培われる。大人も一緒に遊ぶことで互いに刺激し合い、影響を与え合う探究者となり対等な関係性を持つ。保育者は環境を設定するだけでなく、共に遊び、学んでいくことが求められる。

実践実例③ 自然物からイメージする (2025年2月27日)

テラスで自然物を出して遊んでいる時、途中で保育者が積木を出して並べてみた。そこにKRが素材を一つずつ載せ始めた(図1)。KRは電車に興味を持つようになっていたので保育者が「電車にお客さんを乗せてあげているみたいだね」と声をかけた。するとKR

は、「あずさ！」（注：特急列車の名前）と声に出し、積木をどんどん繋げていった。周りにいた子ども達も興味を示して仲間に加わり一緒に素材を並べて遊んだ（図2）。



図1



図2

【考察2】

これまでの自然物との遊び方から、遊び慣れた素材に別のものを加えることで更に遊びが広がる可能性に気づいた保育者が、子ども達の遊ぶ様子を見ながら積木を出し一緒に遊び始めたことや、KRの興味を知った上で投げかけた言葉から見立て遊びに発展していった。友達が作っているものを他児が壊してしまうこともよくあったが、この時は周りにいた子ども達が自然と集まり、KRが作った電車の乗客であるかのように自分の選んだ素材を並べていた。その姿は、一緒に同じストーリーを紡いでいるかのようで、自然物の持つ温かさから情緒が育まれているように感じられた。

環境を変化させるには、素材が多ければよいというものではなく、子ども達の興味を探り、何を提供したいかを考えて用意することが重要だと考える。日常的に自然を取り入れた保育室の環境設定は、自然を身近に感じ興味の対象となるきっかけになったと考える。

実践実例④ 自然物を使った制作遊び～節分制作『鬼ヶ島』～（2025年1月）

節分を前に行事にちなんだ制作遊びを行った。1月中旬の子ども達は、戸外で小石やどんぐりなどを拾い集めては宝物のように握りしめ、得意そうに保育者に見せていた。そのような姿と室内でも自然物に親しみ遊んできた経験も踏まえて、小石と木炭（鬼のイメージから保育者が選んだ）という素材を新たに加えて『鬼ヶ島』を作ることにした。

制作の手順は、素材で遊びながら手に取った台紙に素材を並べて完成というもの。じっくり遊びながら作品に繋がることを考慮し、0歳児室に隣接するミニアトリエに子どもを二人ずつ招いて実施した。



図1



図2



図3

容器に素材を入れて音を鳴らしたり、ひっくり返したりを繰り返す行為はこれまでにも見られたが、新たに加えた素材を手に取ってじっくり見つめ、手触りを確かめる姿も多く見られた（図1）。また、小石をステンレスの容器に入れると木片や木の実とは違う大きな音が鳴るのを面白く感じたのか、器から器に入れ替えたり、高い位置から石を容器に落としたりするなど、子ども達が様々に試しながら遊んでいた。

台紙に素材を並べるという行為は、低月齢児にはほとんど見られず、素材をいくつか並べたとしてもすぐ台紙をひっくり返した。そこで、台紙の上で素材の入った器をひっくり返し、素材が載った頃合いを見て「鬼さんのおうちできたね。もらってもいい？」と引き上げ、遊んだ痕跡を作品とした（図2、3）。台紙を引き上げても子ども達はそれにこだわることもなく、残っている素材で遊び続け、余韻を残しながら制作遊びを終えた。

高月齢児は台紙に素材を並べてみようとの声かけに対して、素材をじっくり選んで台紙に配置していた。



図4



図5



図6



図7

KRは木炭を手に取っては目を凝らし、自分が並べた景観を途中で手を止めて確認しながら進めていた（図4、5）。KKは細長い木炭を縦に置こうと奮闘した。倒れても何度もチャレンジするうちに手つきが慎重になり、そっと手を離すと木炭が立った。息を詰めて集中していたことが表情からも伝わる（図6、7）。

じっくり遊べることを考慮して設定した環境だったが、MMだけはその環境に馴染めず、初回こそ素材を触りはしたものの台紙に素材を載せることではなく、その後は声をかけても拒むことが続いた。そこで、一階ホール前にある広いテラスに環境を移し、他児5名と一緒に招いてみると素材を手に取り遊び始めた（図8）。しばらくして保育者が台紙を出すとカップをひっくり返して素材を載せた（図9）。「鬼さんのおうち、できたね」と声をかけると嬉しそうな表情を浮かべ制作を完成させた（図10）。



図8



図9



図10

【考察 3】

これまで日常的に自然物で遊んできた経験は安心感に繋がり、子ども達が興味を持っているものと組み合わせたことで、新鮮さやワクワクした気持ちが湧いて制作遊びを楽しめたと考える。(図 1、4) からは、新しい素材に対する好奇心や疑問を膨らませているように感じる。(図 4) では、木炭を多く並べていることから、これまでの素材にはなかった黒という色にも惹かれていると推察する。(図 4~7) までの様子から「鬼のおうち（鬼ヶ島）」を作っているという意識は薄いかもしれないが、自分にとって価値のあるものを見極める力を養いながら、何かを作り上げる面白さに目覚め、意思を持って作っているように感じられる。完成させた達成感や満足感を味わうことは自己肯定感にも繋がるであろう。

(図 8~10) からは、MM の様子に合わせて環境を変えたことが遊ぶ意欲を引き出したことがわかる。友達が一緒という安心感が「やりたい気持ち」に繋がった。0歳児にとって安心感を得られることが好奇心を育む上で何よりも欠かせない要素である。その子らしさを出せるにはどんな環境が相応しいのか、保育者がよく考えて設定することが重要だと考える。

(2) 光の探究

実施実例⑤ 光を探る (2024 年 9 月 17 日)

HR は壁に大きな光を見つけた (図 1)。その直後、側にあったライトテーブルから一枚の光る紙を手に取った (図 2)。紙を広げてみようとするが、丸まった紙は扱いが難しく思うように広がらない (図 3、4)。何度も繰り返しているうちに自分が手にしている紙から光が壁に映っていることに気づく (図 5)。手にしていた紙を凝視した (図 6)。その後も繰り返し紙を触り、同じように壁に光が映るとその場を去った。



図 1



図 2



図 3



図 4



図 5



図 6

実施実例⑥ 影を知る（2024年11月）

光と同様、影に気づくような環境設定も試みた。素材を棚に整然と並べるのではなく、入室した際に普段との違いに気づいて手に取ってみたくなるように窓辺に並べたり、ライトテーブルに落ち葉を置いたりもした。すると、容器の影に気づいてかざして見たり、葉っぱを窓に透かして見たりする行動も見られ、影に対する興味も高まっていった。



～MHの影探し～（2025年2月）

2月7日の夕方。MHが網戸の模様が保育室の床に映っているのを発見して指をさした（図1）。更には自分の上着やズボンにも同じものが映っていることに気づいた（図2、3）。「きれいだね。網戸の影が映っているね。それは影って言うんだよ」と保育者が伝えると「かー、かー」と声に出した。



図1

図2

図3

2月13日の夕方。MHは強風で揺れる木の葉の影が床に映っていることに気づく（図4）。「かー、かー」と言いながら、木漏れ日を追って指をさした（図5）。



図4

図5

2月18日、朝の陽射しが長い影を床に落としていた。影への興味が膨らんでいるMHの隣で保育者が体を動かし、自分が動くと影も動くことを知らせた（図6）。それを不思議

に思ったのか一人で試している（図7）。座ると影が見えなくなり、どこに行ったのか探していた（図8）。



図6



図7



図8

2月20日午前。ついにMHは散歩先の公園で、地面に映った自分の影を見つけた。そして、「かー、かー」と言って保育者に知らせた（図9）。

図9

【考察4】



実施実例⑤のHRは光の元を知りたくて自分なりに仮説をたてて近くにあった紙を手に取っているように見える（図1、2）。丸まった紙を何度も広げようとする行動からも探究心の芽生えを感じる（図3、4）。光が映ると、手にした紙を凝視していることから、自分の行動が光に繋がったと感じたのではないか（図5、6）。光を意識した環境がHRの探究のきっかけとなり、素材が身近にあるという、自分なりの仮説をたてて実験できる環境にあることが、HRの光への探究心を満たしたと考える。

実施実例⑥からは、今まで部屋になかったはずのもの（影）が床に姿を現したことに不思議さを感じているのが表情からも伺える（図1）。上着を引っ張って、よく見ようとする行為には、実施実例⑤同様「これは何だ？この正体を知りたい」という未知なるもの（影）に対しての興味の強さが表れている（図1、2）。木漏れ日は絶えず動いており、それまでに見た動かない影との違いに気づいていることが、立ち上がり興奮気味な本児の様子からも伺える（図4、5）。そして、前回伝えた「影」という言葉で表わしていることから本児の吸収力の早さを実感した。（図6～8）では、保育者が関わり体を動かしてみると、MHの影へ対する理解度も深まったといえよう。（図9）では、一人で自分の影を見つけたことを喜ぶ姿があった。自分が発見した事象と一緒に驚き、共感してくれる存在も探究を続ける後押しになったのかもしれない。子どもの気づきを見過ごさず環境を整え、子どもの興味に向き合い伴走することが重要だと考える。

2、モノとの関りをアートで紡ぐ

（1）『感触遊び』から『ひなまつり制作』へ

保育室に常設したライトテーブルを活用して様々な素材で遊んできたが、中でも“塩”は

5カ月を通して感触遊びから制作遊びへ展開していった。

実施実例⑦ 塩の感触遊び (2024年10月～2024年12月)

戸外で砂や土に興味を示して触る子ども達の姿から、室内でも砂を触って遊べないかと考えた。まだ口に入れて確かめたい子どもが多かったこともあり、安全性や入手しやすさから、砂の代わりに塩を使うことを思いついた。塩をライトテーブルで触れば、感触だけではなく光の探究にも繋がるのではないかとの思いもあった。

初回は消灯した0・1歳児の受入室で行った。部屋が薄暗いこともあり、出入口の窓から興味を持って見ていた子どもから誘ってみた。入室したものの躊躇なく塩を触る子どもは一人しかおらず、他の子どもは様子を伺うように塩と遊ぶ友達を見ていた。保育者がつかんだ塩を上から落として見せると硬かった表情を一変させ「あっ、あっ」と声を出し、手を伸ばして触ろうとするなど徐々に警戒心が解けていった(図1)。HRも最初は後ろで



図1



図2



図3



図4

様子を伺っていたが(図1)、楽しそうに声をあげる友達の姿に好奇心をかきたてられたのか、ライトテーブルに近づいて両手を塩に押しつけた。塩が付いた自分の掌に見入っていたが、手をこすり合わせて塩を落とすと、大きく腕を動かしながら塩を触り、光を透かして遊んだ(図2)。臆することなく塩に触れたMHは、塩をつまんで掌に落としたり、模様を描いたりして遊んでいたが、シートに塩が落ちた時の音に気づき、意図して何度も塩を落として音を確かめ、落ちた塩をあえて踏んで足裏でもその感触を味わっていた(図3、4)

その後も、場所をミニアトリエに変えてひと月ごとに塩で遊び、子ども達の発達に合わせ、カップとスプーンを用意したり、自然物と容器を出したりして、遊びが変化していく様子を探った。



図5



図6



図7



図8

最も低月齢の NR は、最初の塩遊びの時は立位が不安定だったこともあり、殆ど触ることはなかったが、三回目では指で塩をなぞったり、カップで擦ったりして遊ぶようになった（図 5）。食具に興味を持ちはじめていた KR は、プラスチック製の小さなスプーンが扱いやすかったのか、食事の時よりも上手にすくってカップに塩を入れ、塩がたまるとシートの上にこぼして遊んでいた（図 6）。TK は自分でカップに入れた塩を「どーぞ」と言って向かいにいた KK に渡した（図 7）。KK もお返しと言わんばかりに自分の持っていたスプーンを差し出した（図 8）。

【考察 5】

初めて対峙する環境や素材に対しての躊躇いは見られたが、友達が遊ぶ様子に影響を受け、保育者が触って見せることで気持ちが動かされ遊び始めた（図 1、2）。塩に模様を描いたり、掴んで投げたりすることは予想していたが、塩がシートに落ちた時の音に気をとめ、それを自分で再現したことには驚かされた（図 3）。実践実例①（図 3）同様、MH の音に対する敏感さ、足裏でも感触を確かめる好奇心の強さを感じる（図 4）。（図 5）NR は、塩の遊びを繰り返し行う中で成長し、他児と同じように遊べるようになったことで積極性や好奇心が増してきたが、初回当時の NR の成長に合った環境も設定すべきだったとの思いも拭えない。0 歳児は月齢差が大きく、一人ひとりの成長に合った環境設定が重要だと感じる。（図 6）KR は、食事では手づかみで食べることが多かったが、遊びを通して楽しみながら「すくう」動作が出来るようになり自信や意欲に繋がったのではないか。TK と KK のやりとりは、普段の互いに思いやる姿が垣間見られる。登園時に入室を拒んで泣くこともあった TK だったが、先に登園している KK が入口に迎えに来ると泣き止み、手を繋いで部屋に入るというのがルーティンのようになっていた。日頃の関係性からこのようなやりとりが生まれたのではないかと考える（図 7、8）

塩の感触遊びは組み合わせる素材を変えるたびに、子ども達が遊び方を考え、違う面白さを体験していった。

実施実例⑧ 塩と自然物（2025 年 1 月）

当園では、玄関の展示ケースに子ども達の制作物を飾っており、月ごとにクラスが順番で担当している。2 月は 0 歳児クラスの担当だった。子ども達が塩で遊んだ跡には、プリミティブな趣があると感じていたこともあり、塩と自然物で遊んだ痕跡を展示してみたいと考えた。

展示ケースに入る大きさのプラダンボールの上に塩を撒いて遊べるように設定。ライトテーブルは使用しないので、場所は子ども達が好きな 0 歳児室のテラスに変更した。

子ども達は塩のキャンバスを取り囲むと自由に移動しながら筆を滑らせた。素材の入った容器をひっくり返して遊び、木の枝でもお絵描きを楽しんだ。



その後、0歳児の塩アートは玄関に飾られ、保護者や園の職員はもちろん、園の前を通行する地域の方々の目にも触れることになった。

実施実例⑨ 塩を使った制作遊び～ひなまつり制作『菱餅』～（2025年2月）

ひなまつり制作では、これまで遊んできた塩に色を付けて『菱餅』を作ることにした。

手順は、塩とパステルを同じ透明ボトルに入れ（図1、図2）、塩に色が付くまで振って遊ぶ（図3、4）。色の付いた塩を緑、白、ピンクの順にスプーンでくっついて角型の容器に入れて完成である。



図1



図2



図3



図4

塩をくっつて透明ボトルに入れることはできたが、2、3回入れると逆さまにして塩を出してしまった。そこで、くっった塩はプリンカップに入れて、ある程度たまつたら保育者がボトルに移し替えることにした（図1）。パステルをボトルに入れることは、チェーンやストローの穴落としを好んで遊んでいたこともあり難なく行った（図2）。塩とパステルの入ったボトルは振ると音も鳴るので子ども達は喜び、遊びながら塩に色が付いた（図3、4）。



図5



図6



図7

子ども達は園内に飾ってあった雛人形を保育者と一緒に見て、制作遊びが始まると写真を見ながら、菱餅の色には意味があることなど“ひなまつり”にまつわる話を聞いた。写真

の菱餅を指したり、緑色の塩を見て「はっぱ」と言ったりして、興味を持って制作遊びに向き合った（図5）。

ほとんどの子どもが塩をすくって直接角型の容器に入れることができた。保育者は子どもの様子を見ながら「今度は白い塩を入れてみようか？」と声をかけて進めていった。低月齢児は途中で角型の容器をひっくり返そうとしたため、スプーンから直接ではなく別の器に塩をためてから角型容器に移すという工程にして完成させた（図6、7）

【考察6】

実施実例⑨からは、屋外という解放感もあったとは思うが、塩の位置を変更したことにより、全景を見渡しながら遊ぶことが面白さに繋がり作品になった。黒いプラダンボールは白い塩とのコントラストがはっきりして、視覚的にもライトテーブルとは違う面白さを感じたことだろう。

実施実例⑩では、子ども達の興味、できることを遊びに取り入れることで制作の準備も子どもが一役を担った。また、塩が三色あったことは集中力を途切れさせることなく容器に入れることができたと考える。完成した菱餅が「子どもにはその力がある」ということを改めて教えてくれた。

このように、遊び慣れた素材が環境を進化させたことでアートにも繋がり、自分の手で作り出す楽しさを体感できたのではないかと考える。

（2）本物に触れる

実施実例⑩ だるま制作（2024年11月）

当園では、子ども達の制作物や研究内容、活動の様子を記録したドキュメンテーションを展示するアート展を毎年開催し、一般公開している。0歳児クラスは子ども達が大好きな絵本「だるまさん」シリーズ（かがくいひろし作）から着想し、本物のだるまに触れて遊びながら制作に繋げていくことにした。

保育室の一角にだるまと触れ合うコーナーを設定。

手順は、だるまと遊んでいるところに、保育者が出した大きさの異なる楕円形の赤、青、黄色、緑の紙粘土の中から好きなものを手に取り、触って遊んだものを作り出す。

保育者が設定している時から興味津々で見ていた子ども達だったが、本物のだるまを目の前にして、初回から躊躇なく近づいて触り、紙粘土を触って遊んだのは半数にも満たなかった（図1）。



図1



図2



図3

多くが保育者の膝に座ってだるまを見たり、保育者が転がしただるまを追いかけたりするうちにだるまととの距離が縮んでいった。二回目以降になるとだるまを抱かえて歩いたり、自分が持っている粘土をだるまに渡そうとしたり（図2）するなど、だるまと遊んで紙粘土にも触れた。鏡をのぞき込んだり、ライトの角度を変えながら紙粘土を照らしてじっくり見たりする（図3）など、だるま以外のものにも関心を寄せていた。

＜アート展 0歳児保護者の感想より＞

- ・0歳のアートって……と思いましたが、アートでした。
丸い塊がだるまさんに見えました！子どもも自分の作品をきれいに展示してもらって誇らしげに見えました。
- ・同じくらいの子どもでも粘土の扱いにみんなに差があることを初めて知りました。
- ・園での過ごし方を少し見られた気がして良かったです。
- ・だるまを絵本で読み、実物を見て、作ってとかなり刺激を受けたのではないかと思います。子どもの知らない一面を見ることができました。
- ・制作している動画や制作エピソードも見られてとても楽しかった。



【考察7】

子ども達がだるまと遊んだ様子から、0歳児にとって本物が持つインパクトがどれほど強いものなのかが改めてわかる。初回は絵本と本物のだるまは違うということを理解し、気にはなるけれど警戒しているようだった。それでも、保育者が一緒に遊び、安心できる環境であったからこそ、近づいてみよう触ってみようと揺られた好奇心を満たすことができたと考える。

アート展へ対する保護者の感想からは、作品だけでなく活動の様子に関心を寄せられていることが伝わる。アート展が作品を展示する行事としてではなく、情報発信と子ども理解の場の一つと捉えてもらえるよう積み重ねていき、保護者と保育者が子ども観を共有していく様子が見えた。遊びのプロセスを丁寧に追っていきたい。

実施実例⑪ だるま制作～YKの葛藤～

初回では、だるまは全く眼中になく、鏡に興味を示していたYK。顔を近づけのぞき込み、鏡を持って歩き回って遊んでいた（図1）。二回目では、だるまに近づくが、あと一步が踏み出せず「うー」と声を上げていた（図2）。保育者がYKの指していただるまを床に転がしてみると拾い上げてテーブルに置いた（図3）。その後は、前回あれほど夢中になっていた鏡には目もくれず、だるまを手に取っては保育者に渡すことを繰り返した。



図 1



図 2



図 3

実施実例⑫ だるま制作 ~「イヤ」という権利~

WF は、だるまコーナーに来たものの、保育者の膝に座ったまま他児がだるまと触れ合う様子を不安そうな表情で覗き込んでおり、初回はだるまを触ることなく終了した（図 1）。二回目では、保育者が絵本のフレーズを口にすると硬い表情ではあったが、だるまの目を指した。それでも、自分からだるまに近づくことはなく、紙粘土を見せてても「イヤイヤ」と言って終了した（図 2）。

絵本を見ながら自分の歯を指すなど、“だるまさん”には親しみを感じている姿から、保育者と絵本を読んだ後に紙粘土を見せてみることにした（図 3）。

絵本は楽しく読み終わったが、保育者が紙粘土を出したとたんに顔を背けた。表紙の上に紙粘土を置いてみると掴んで床に投げつけた。「もう終わりにする？」と訊くと「うんうん」と頷いて終了した（図 4）。



図 1



図 2



図 3



図 4

【考察 8】

実施実例⑫の YK は、普段から室内に設置された鏡に自分の姿を映して遊ぶのが好きなので、親しみのある鏡に気持ちが向いたのかもしれない。しかし、二回目の様子からは、鏡よりもだるまに関心が移っており、もどかしい気持ちが動作や表情に表れ、0歳児ながらも葛藤していることがわかる。保育者がだるまを転がしたことで YK の気持ちが動いたことから、子どもが一歩を踏み出すにはさりげない援助が必要なことを改めて感じる。その後、だるまを手に取っては保育者に渡すことを繰り返した姿から「ほら、ぼくもだるまを触ったよ」という達成感や自信が伝わった。

実施実例⑬の WF は、クラスの中で唯一、だるまを好んで触らなかった。以前、風船で遊んだ際、風船を見ただけで激しく泣き出したこともあり、そのような形状のだるまも嫌

なのではないかと推察した。やり方を変えて試みてもWFが紙粘土を触って遊ぶことはなかったが、「もうたくさん！」というように気持ちを表したことをプロセスの一つとして捉え、投げつけた紙粘土を作品として展示した。

本物に触れインスピレーションを感じ、子ども達は様々な反応を示した。楽しく嬉しいことばかりではなかったが、回を重ねるごとにだるまと仲良くなっていく姿、「イヤ」と気持ちを表す姿を頗もしく感じた。

すべての実施実例を振り返ってみると、環境設定の重要性を改めて理解することができた。結果物より何かを感じる体験が重要で、それこそが「科学する心を育てる」ことに繋がると考える。子どもの心に響く環境を整え、子どもに合わせて変化させながら、一緒に遊び学んでいくことが私たちに求められていることだと考える。

III 考察に基づく課題と今後の方向性や計画

環境は単に場所ではなく、子どもの成長や興味によって変わり、進化していくかなければならない。そのためには子どもをよく見て、どんな種を蒔こうか考えしていくことが大切である。

法人の運営理念に「みんなでみんなをみていく園づくり」を大切に同僚性の向上に努めることを掲げている。保育者個々が担当するクラスだけでなく、他のクラスにも感心を寄せ、園全体で同僚性を発揮していくことで「科学する心を育てる」ための環境が変化と進化をしながら豊かなものになっていくのではないか。また、それには様々な活動の様子をドキュメンテーション等で保護者へ発信し、子ども理解を共有し深めていくことも必要だと考える。

今回は環境が0歳児の遊びにどのような影響をもたらすかを追ってきた。言葉でのコミュニケーションがほとんどできない中での取り組みだったが、乳幼児教育において大切なことの根源を改めて実感する機会となった。

今後については、幼児の活動に目を向け、彼らが何に興味を持ち、どう感じ、それを言葉や言葉以外のものでどのように表現していくのか、遊びの中から生まれる学びのプロセスを追っていきたいと考えている。

参考・引用文献：「だるまさんが」「だるさんの」「だるまさんと」

(ブロンズ社) かがくいひろし作

研究代表者：戸塚陽子

執筆者：雨宮恵利子

実践協力者：中村美佐子

他職員